

# 在日ムスリムによる地域交流—モスクでの聞き取り調査から

子 島 進  
服 部 美 奈

## 1. はじめに

本稿は、アジア文化研究所のプロジェクトである「在日ムスリムによる多文化共生社会構築の試み—インドネシア人、トルコ人、パキスタン人の宗教ネットワークを事例に」の報告である。2017年より開始した大塚モスク（東京）、名古屋モスクならびに岐阜モスク、そして東京ジャーミイでの聞き取り調査の中間報告として、まとめたものである。

以下、大塚モスク、岐阜モスクならびに名古屋モスク、東京ジャーミイの順に報告し、最後に現段階で見えてきた特徴を列挙することとする。

## 2. 大塚モスク（子島進）

大塚モスクでは、さまざまな地域交流が行われている。本稿では、ムスリム・コミュニティの形成に大きな役割を果たしたアキール・シディキさんへのインタビュー（2017～2018年）を通して、日本におけるムスリム・コミュニティの形成について記述することとしたい。また、同氏の発言部分はインデントで示し、一人称で表記してある。状況の説明は筆者（子島）が加えたものである。さらに、大塚モスクの地域交流に関するハルーン・クレイシさんへのインタビューの内容も追記する。

### 2-1. アキール・シディキさんへのインタビュー

私は1944年、インドに生まれた。ウツタル

プラデーシュ（UP）州のアーザムガル（Azamgarh）が生地である。シディキという姓は、アブー・バクル・アッ＝スイッディー・クに由来する（アブー・バクルは、預言者ムハンマドの死後、ムスリム共同体を率いた初代カリフである）。時代を特定することはできないが、アブー・バクルの子孫がアラビア半島から西アジアを経由して、インドへ移住したのだと考えられている。

1947年、英領インドはイギリスからの独立を勝ち取った。しかし、この独立は、インドとパキスタンという二つの国家が分離する形をとった。短期間に一千万人を超える人々が—ヒンドゥーはインドへ、そしてムスリムはパキスタンへ—移動したことで、社会的大混乱が生じた。国境を越えた人口移動は、その後もしばらく続いた。

私の叔父（父親の弟）はパキスタンのシンド州ハイデラバードで軍隊勤務をしていた。この叔父が、5才の私を呼び寄せたことから、両親の元を離れてパキスタンで暮らすこととなった。その後、2、3年して両親たちもハイデラバードへ移住した。

1962年にガバメント・カレッジを卒業した。その後、カラチにあるNED Government Engineering College（1977年、NED University of Engineering and Technologyへ改称）へと進学したが、家計は苦しかった。家庭教師をするなどして学費を稼いでいた

が、勉学を続けられない状態となった。そこで海外へ留学できないかと考えて、日本を含むいくつかの国の文部省に手紙を出した。返事が来たのは唯一日本からだけだった。それまで日本人の知り合いはいなかったし、日本という国に関しても、それほど具体的なイメージはもっていなかった。第二次世界大戦で壊滅的な打撃を受けたものの急速に復興を遂げ、先進国の仲間入りをしつつある国という程度の認識だった。

カラチの領事館とやりとりをして、出発前には当時の領事にも挨拶をした。このとき、6名の学生がパキスタンから日本へと派遣された。西パキスタンから3名、東パキスタン（後のバングラデシュ）から3名である。

この留学生招聘プログラムでは、アジアからの留学生はきわめて手厚い経済的な待遇を受けている。往復の旅費支給、授業料全額免除、学生寮に部屋があてがわれることに加えて、月額2万5000円の奨学金が支給された（当時の大卒の初任給は2万円程度）。斉藤泰雄は、「わが国の国際教育協力の理念及び政策の歴史的系譜：草創期から70年代初頭まで」において、次のように記している（斉藤、2008年、151ページ）。

1954年、「国費外国人留学生実施要項」が作成され、その制度が開始された。招致する留学生は、外国の大学を卒業してからわが国の大学、大学院等において研究を行う「研究留学生」と、高校卒業後わが国の大学学部に進学する「学部留学生」の二種類とされた。研究留学生は、一部は、欧米諸国からも招致されるが、学部留学生の場合、その対象はアジア諸国のみに限定されていた。1962年、当時の文部省で、留学生関係の事務を所掌していた調査局国際文化課長であった佐藤薫は、国費留学生招致プログラムの特色を次のように説明している。「わが国はアジアの一員であることの自覚と責任感から、昭和27、28年から、それぞれの要請に応じ、経

済援助、技術援助をはじめるといった。この経済援助、技術援助の一環として、あるいは経済援助にさきがける人づくりの一つの協力方策として、とりあげられたのが留学生招致である。……この学部留学生招致制度は、わが国が、世界諸国にさきがけて実施した独自のものであるが、その狙いとする所は、大学等の数が少ないアジア諸国の、国づくりの指導者養成に協力しようとするところにある」（佐藤 昭和37年p.233）。1954年、最初の留学生23人を受け入れたのを皮切りに、国費留学生は、しだいにその数を増していった。1956年7月、文部省の中央教育審議会も『教育・学術・文化に関する国際交流の促進について』を答申し、こうした動きを促進することを提言した。

1963年に留学生として来日し、まず千葉大で日本語の勉強をした。その後、東京工業大学に入学した。当時は日本で暮らすムスリムは少なかった。東京近郊のムスリムは、週1回東京ジャーミイで礼拝をしていたが、何か社会的な活動をするということにはなかった。

在学中の1968年に結婚した。1969年、東工大を卒業すると、日本には残らずパキスタンに帰国した。留学生仲間の中には、日本にその後もずっと留まる者もいたが、帰国は母親との約束だった。また、この年には日本精工というベアリング（軸受）のメーカーで研修を受けた。ちょうど、この会社の合弁会社 Rcd Ball Bearings Ltd がカラチに誕生したので、そこで働くことにした。400人ほど従業員がいる会社で、オフィスはカマル・ハウス（Qamar House）に、工場はカラチのコランギー地区（Korangi）にあった。

1974年、パキスタン人の上司とあわなくなって辞めた。それから1、2年ほどいろいろな仕事をやってみた。日本語の翻訳をやったり、会社を作って旅行業やロブスターの輸出などやってみたりしたが、どれもあまりうまくいかず、赤字になってしまった。1975年、

例の上司が辞めたと聞いて、Rcd 社で再度働き始め、1982年まで、同社で勤務した。

1982年11月6日、十数年ぶりに日本に戻った。再来日した日付は今でもよく憶えている。この間、2、3回仕事の関係で東京に来たことがあり、東京が変化していることはわかっていたので、そんなに大きな驚きはなかった。東京の豊島区大塚に住居とオフィスを構えた。1984年に東栄トレーディングを設立し、社長となった。主としてベアリング関係を扱う貿易商社であり、社員6人でスタートした。

当時、好景気の日本では労働力が不足し、ムスリムも来日するようになっていた。初来日した1963年当時は、日本に住むムスリムは非常に少なかった。しかし、この時期から状況は大きく変化した。1985～6年頃に中東での仕事が激減し、多くのパキスタン人も出稼ぎのために日本へとやって来るようになった。当時はビザの免除協定があったため、簡単に入国することができた。1989年に免除措置が停止となると、入国審査は難しくなり、日本にやって来るパキスタン人やバングラデシュ人の数は減ることになる。

ムスリム人口が増えたことによって、モスクがないことが問題となる。1938年に建てられた東京ジャーミイが老朽化し、1986年に解体されてしまった。それにより、毎週の金曜礼拝や年2回のイード（イスラームのお祭り）を行う場所を確保できなくなり、このことが多くのムスリムにとって悩みの種となった。ホテルで宗教イベントを行おうとしても、汚すからといった理由で受け入れてもらえないこともあった。イードの会場を確保するためにイード委員会を作ったり、イベント名目で会場を借りるために、ITEX（International Trade and Exhibition）というイベント会社を立ち上げたりしたこともあった。運よくホテルで会場を借りられたとしても1回に200万円も使用料がかかっていた。そこで、皆で協力してモスクを建てることを決断し、モス

ク建設委員会を作り、資金集めに奔走した。1998年にトルコ政府が東京のモスクを再建することが決まり、集めた資金はそちらに譲ることとなった。その後、やはり自分たちのモスクが欲しいということとなり、再度寄付を集めて、1999年に大塚駅に近い建物を購入し、モスクとして改装した。

イードやモスク建設の委員会活動がベースとなって、1994年に日本イスラーム文化センター（以下JIT）が設立された。JITは、宗教法人として文部科学省に登録されている。アキール・シディキさんはJITの二代目会長に就任した。当初、JITの活動はモスク管理と新たに来日するムスリムの世話だった。ムスリム人口が急増する1990年代前半、ムスリムが生活するための基本的な環境はまだ十分に整っておらず、ムスリムは集団礼拝、食事、教育など様々な問題に直面していたのである。その後も、地域との交流や墓地の確保など、新たな問題に直面する度に、同氏は会長として奮闘してきた。具体的には、大塚モスク設立につづき、1999年にはハラール認証を開始した。つづいて2004年にイスラミック幼稚園、2015年にイスラーム霊園を設立した。

ハラール認証を始めたのは1999年である。当時、ある者は「チキンだけ食べる」、ある者は「オーストラリアのビーフならばいい」と、それぞれ考えて食生活を送っていた。肉を食べないムスリムもいた。そんなとき、ある日本の会社が「ハラールの証明書が欲しい」と言って、JITに連絡してきた。スリランカに漬物を輸出するのに、証明書が必要になったのだった。その頃はハラールの証明に関しては、まったく何の準備もなかったが、その漬物は明らかにハラールであるということで、モスクのイマームが証明書にサインした。

ムスリムの子どもが成長すると、教育の問題が出てきた。1992～3年に幼稚園を造った。毎年10人超の子供たち幼稚園に通っている。

幼稚園の次は小学校の問題が浮上した。2017年から始めた小学校は、卒業までは生徒が増えていくので、すでに手狭になっている。大塚モスクを取り壊し、7階建てのモスク兼小学校を建てる計画が出ている。費用はおおよそ7億円で、建設におおよそ3年かかる予定である。

新しい子供が生まれる一方で、亡くなる人も出てくる。山梨にムスリムのための墓地があるが満杯になってしまったため、新しい土地を探した。しかし、ムスリムは土葬を行うため、近隣住民からなかなか受け入れられなかった。10年前には、栃木県足利市に土地を確保したが、地元住民の反発にあって計画が頓挫した。

「不足する「ムスリム霊園」日本で暮らすイスラム教徒の“永眠の地”はどこに」というネット記事において、アキールさんは、この墓地について詳しく語っているので、引用したい（伊吹、2017年）。

「完成すれば、山の中の広い土地に約300体を埋葬できるはずでした。何度も市役所に足を運んで説明会も開きましたが、反対の旗やのぼりが立てられて、ついに私たちも諦めた。自分の土地に知らない人が遺体を運んでくるのはいやだ、自分の家の近くに異教徒の墓ができるのはいやだということでしょう」

当時の朝日新聞によると、市の担当課には600人を超える住民から建設反対の嘆願書が届き、「建設を許可するためには地元の理解が不可欠」とセンターに伝えていた。

アキール会長らはその後も土地を探し歩き、2013年8月によりやく茨城県常総市にある三福寺の谷和原御廟霊園の協力を得て、墓地を確保した。約1700平方メートルの土地に約450体を埋葬することができ、「この先、あと20年は大丈夫」と会長は言う。

20年という時間は長いだろうか、短いだろう

か。会長は、将来的には各地に霊園が増え、埋葬や墓参りの負担を軽減することができれば、と考えている。

「理想としては、各都道府県に一つくらいは霊園があればと考えています。イスラムでは仏教のようなお墓参りの習慣はありませんが、それでも、家の近くに家族が眠っていていつでも会えることを望むのは、人間の心じゃないですか」

「だから、もう少しお互いの文化を知り、尊重し、理解が進めばと願っています。私たちはみんな同じ人間ですから」

アキール氏はインタビューにおいて、ムスリムの土葬について次のようにもコメントしている。

土葬は非常にエコである。土葬では、15年程で骨がだいたい無くなるため、再び掘り返して新しい骨を埋めることができる。つまり、土地をリサイクルして埋葬ができる。日本人からは「伝統的な火葬をやるべきだ」とたびたび言われるが、日本でも火葬は数十年前に取り入れられたもので、どちらかといえば土葬の方が日本の伝統的な埋葬方法ではないだろうか。

アキールさんは、ムスリムだけで閉鎖的なコミュニティを作るのではなく、地域コミュニティに溶け込もうと努力を重ねている。たとえば、大塚モスクは毎年、大塚のお祭りにも積極的に参加している。この地域交流という点について、ハルーン氏への聞き取りからより具体的に確認したい。

## 2-2. ハルーン・クレイシさんへのインタビュー

アキールさんのインタビューに登場したように、大塚モスクを運営するのがジャパン・イスラミック・トラスト（JIT）である。JITは



1994年に創設された。そして、1999年に大塚モスクとなるビルを購入している。このJITの事務局長を務めるハルーン・クレイシさんに、現在の地域交流についてインタビューを行った(2018年10月6, 19日, 大塚モスク)。以下はその概要である。

大塚モスクはオープンから地域との関係を大切にしてきました。モスクの活動を大きく3つに分けて説明します。まず、信者向けの活動があります。それから、地域のイベントに参加するものがあります。そして、JITが行う国内外で行う支援活動です。

信者向けとしては、子供を主たる対象とするクルアーン朗読のコンテスト、親睦を深めるバーベキュー・パーティー、そして自然に親しみながらイスラームを学ぶキャンプなどがあります。年二回のイードは、イスラームにとってとても大切な行事です。この日には、何百人というムスリムがモスクに集まり、お祝いします。そして、しばらく会っていなかった友だちと再会し、おたがいの消息を確かめあいます。社会的にも大事なお祭りで、地域のみなさんにも参加してもらうイベントという性格もあります。

地域のイベントとしては、春に行われる「南大塚さくらまつり」と、夏に行われる「東京大塚阿波おどり」がありますが、この二つにはモスク開設当時から参加しています。私たちは踊ったりはしないのですが、チャイやカレーの屋台を出しています。それから、お祭りの機会に、ご近所を回ってあいさつをしています。イスラームでは、ご近所付き合いを大事にしないと教えています。

国内外での支援活動としては、2001年に始めたのがアフガン難民に古着を送る活動です。このとき、日本中から古着が届いて、モスクが古着の段ボール箱でいっぱいになりました。それから、2011年の東日本大震災の時は、大塚の商店街のみなさんと一緒ににおにぎりを握ったり、食料品や日用品を集めたりして、東北へ届けま

した。特に、福島県のいわき市には繰り返し行きました。暑くなってからは、いわき市にあるモスクで調理をして、避難所で配りました。東北での活動が一段落してから始めたのが、池袋でのホームレスへの炊き出しです。長年、池袋で炊き出しや衣類の配布、医療相談を行っているNPOのTENOHASHIさんに協力しています。

ここ数年は、シリアやロヒンギャの難民への支援に力を入れています。シリア人や、ロヒンギャの避難先になっているバングラデシュの人が中心になって、難民を支援しています。特にシリア支援には、日本人の若い人も参加しています。

去年から、東洋大学との交流が活発になってきました。学生さんがモスク付属の小学校の先生を引き受けてくれています。子供たちが運動する場所がなくて困っていたのですが、大学の体育館で学生さんと一緒に運動をしたり、サッカーをしたりして、子供たちも親もとても喜んでいます。この活動はこれからも続けていきたいです。

### 3. 岐阜モスク・名古屋モスク (服部美奈)

訪問日：2017年12月11日 (月)

訪問先：バーブ・アル＝イスラーム岐阜モスク<sup>(1)</sup> (13時～14時半)

名古屋モスク<sup>(2)</sup> (16時～17時半)

応対者：オバリ・アブデル・カーデル氏 (岐阜モスク)

サラ クレシ好美氏 (名古屋モスク)

訪問者：子島進 (東洋大学)、服部美奈 (名古屋大学)

バーブ・アル＝イスラーム岐阜モスク (以下、岐阜モスク) と名古屋モスクは、ともに宗教法人名古屋イスラミックセンターが運営している。同法人代表はクレシ・アブドルワハブ氏である。岐阜モスクの所在地は岐阜県岐阜市古市場東町田8番、名古屋モスクの所在地は、名古屋市中村区本陣通2丁目26-7である。岐阜モス

クにはムスリム文化センターが附設されている。

### 3-1. 岐阜モスク

岐阜モスクでは、オバリ・アブデル・カーデル氏（以下、オバリ氏）にインタビューを行った。オバリ氏はダマスカス出身のシリア人で、1972年にアレppoで生まれた。2002年の来日は、徳島大学医学部に留学するためであったが、その後、2011年まで徳島に滞在する。徳島の礼拝施設は当初、ムサッラーであったが、資金を集めて2008年8月に土地を購入し、10月にモスクが開設された。オバリ氏は2008年10月から名古屋に移る2011年まで、このモスクでイマームを務めた。徳島のモスクは町の内にあったため、毎月、周辺の人たちをモスクに誘って活動をしていたという。

2011年に名古屋に移り、2015年11月まで滞在、その後、2015年に名古屋から岐阜に移り、岐阜モスクのイマームとして働いている<sup>(3)</sup>。

岐阜モスクのウェブによると、モスクで行われている活動の内容は以下のとおりである。以下の活動は、イスラームに関するパンフレットの配布を除いて、主にムスリムを対象にした活動である。

- ・1日5回の礼拝と金曜集団礼拝
- ・イスラームカウンセリング（随時）
- ・イスラームに関するパンフレットの配布
- ・各種年間行事の執り行い
- ・イスラームへの入信手続、入信証明書の作成
- ・イスラーム形式の結婚手続き、結婚証明書の作成
- ・勉強会等の運営
- ・ザカート・サダカの募集

また、ウェブにも紹介されている一般向けの活動として公開講座が開かれており、オバリ氏が担当している。オバリ氏は日本語が話せるため、講座は日本語で行われる。2017年12月時点

での公開講座として、①イスラーム文化講座、②アラビア語講座が開講されている。

「イスラーム文化講座」は、毎月最終日曜日の午前10時から11時半の時間帯に開かれている。テーマは、ムスリムの礼拝や食生活の紹介、アラビア語書道（カリグラフィー）のワークショップ、イスラーム圏の音楽紹介、母国の紹介（シリア、マレーシア、トルコ）の他、ラマダーン企画として「イスラーム流・アンガーマネジメント～感情的にならない方法」、クリスマス企画として「聖典コーランの中のイエスさま」など一般の人が参加しやすい内容となっており、講座終了後には食事が提供される。

「はじめてのアラビア語講座」は、毎月第3土曜日の午前10時半から12時の時間帯に開催され、1年間をかけて初歩のアラビア語が学習できるように構成されている。

オバリ氏によると、「イスラーム文化講座」の参加人数はトピックによって異なるとのことであった。受講者が多かった例としては、テロをテーマにした回、一夫多妻をテーマにした回、アラビア語書道のワークショップを行った回で、約15名～20名の人が参加した。ウェブのほか、中日新聞の無料案内欄に投稿したり、チラシを配布したりするといった方法で周知を行い、主として岐阜周辺の一般の人が参加することであった<sup>(4)</sup>。また、アラビア語講座については現在2名の受講生がいる。なお、上述したように、イスラーム文化講座でアラビア語書道のワークショップが好評であり、アラビア語書道の講座開講の要望が寄せられたため、今後、第2土曜日に開講する予定になっているという。

岐阜市および周辺住民とのかかわりについては、以下のとおりである。

オバリ氏によると、岐阜モスクは岐阜県国際交流センター（Gifu International Center）のメンバーとなっており、年に一度の一大国際交流イベントであるハローギフ・ハローワールドなどのイベントに参加している。イベントでは、

民族衣装や装飾用の布、モザイク、アラビア語書道、エジプトの数珠などの展示のほか、マレーシア人によるアラビア語書道の実演、ラリースタンプを行った。その他、岐阜の草の根文化サロンに参加したことがある。

オバリ氏によると、岐阜モスクが開設される前も開設された後も、イスラームに対する印象はあまり良くなかったという。そのため、日頃から住民の人たちとの交流を心がけている。たとえば、ラマダーン月には毎日食事を提供する。平日で40～50人、土日になると200人ほどの参加があるという。参加者はムスリムが中心であるが、一般の人たちにも開放されている。

オバリ氏はこのほか、岐阜市外国人市民会議委員としても活動している。市役所が行っている「サポート交流ひろば(The Support Exchange Study)」という外国人の子どもをサポートする活動にも参加し、その活動をモスクで紹介している。

なお、町内会活動は、個々のムスリムが暮らす地域でそれぞれ参加している。

岐阜モスクの状況全般については、以下のとおりである。

オバリ氏によると、岐阜モスクに集まるムスリムは、パキスタン人（主として車関係のビジネスに携わる人が多い）とインドネシア人（主として研修生と留学生。この地域では研修生の方が留学生よりも多い<sup>(5)</sup>）が多いという。また留学生は、インドネシア人、マレーシア人が最も多く30名ほど、その他、エジプト人3名とパキスタン人1名を合わせて40名ほどではないかとのことだった。また、毎週の金曜礼拝には120名ほどが集まるという。

オバリ氏によると、モスクでは岐阜大学で防災を専門にしている大学教員（防災・減災センターの村岡治道先生）に来ていただき、防災の話をすることもある。

なお、オバリ氏によると、現時点では日常的に他のモスクと交流するようなネットワークは

ないという。しかし、モスクでよい実践があれば他のモスクに情報提供を行うといった交流は行っているとのことであった。

### 3-2. 名古屋モスク

名古屋モスクでは、サラ クレシ好美氏（以下、サラ氏）にインタビューを行った。サラ氏は宗教法人名古屋イスラミックセンターの渉外理事を務める。代表クレシ・アブドルワハブ氏との間に4人の息子さんをもつ。

名古屋モスクは、名古屋イスラム協会会員の分担金および国内外のムスリムからの寄付により資金を集め、現在の場所に土地を購入し、1998年7月に開所した。名古屋イスラム協会は1988年2月、留学生を中心に結成された団体で、当時は桜山会館などの留学生寮で金曜礼拝や、ラマダーン関係の行事を行っていた<sup>(6)</sup>。

モスクは本来、礼拝のための場所であり、必ずしも地域交流を目的としていないことが前提であるとサラ氏は語る。現在日本にあるモスクのうち、地域との交流活動をしているモスクは10か所もない。活発な活動を行っているモスクとしては、①大塚モスク（東京）、②東京ジャーマーミー（東京）、③名古屋モスク（名古屋）をあげることができるが、むしろこれらのモスクの方が特殊である。多くのモスクは日本人のための窓口をもっておらず、ホームページをもっているモスクでも訪問を促すような一文がないのが現状である。

2017年5月現在、全国には98のモスクがあるとされる。サラ氏によると、このなかでホームページをもっているモスクは27か所、日本語で発信しているモスクは16か所であり、さらに見学希望者の受け入れを行っているのは6か所のみである。このように、日本語による発信を行い、見学希望者の受け入れを行っているモスクが少ないため、名古屋モスクには遠方からの見学者・訪問者が多いという。

### 3-2-1. 名古屋モスクの活動

名古屋モスクへの見学者・訪問者数は2014年にホームページを開設して以来、以下の状況である。多くの見学者・訪問者が名古屋モスクを訪れていることがわかる。また、ホームページでは見学者・訪問者の感想を掲載している<sup>(7)</sup>。

2014年	202名	68件	学校関連22件
2015年	339人	138件	学校関連67件
2016年	351人	127件	学校関連44件
2017年	410人	56件	学校関連98件 <sup>(8)</sup>

名古屋モスクではモスク近隣の人々と活発な交流を行っている。2015年以降の具体的な活動についてはホームページで詳しく紹介されている<sup>(9)</sup>。イフタル（断食明けの食事）への招待（2015年7月2日）、モスク近隣の茶道教室の先生からのお茶席への招待（2015年7月19日）、モスク近隣の人々のモスク見学（2015年7月28日）といった交流活動、2017年には、マープル染め体験（2017年2月18日）とお茶席への招待（2017年3月1日）、イードのご挨拶（2017年6月27日）などである。この他、名古屋モスクでは他宗教や他団体との交流も積極的に行っている。

モスク全般の活動については、以下のとおりである。

名古屋モスクのウェブによると<sup>(10)</sup>、モスクで行われている活動の内容は以下のとおりである。岐阜モスクと同様、以下の活動は、イスラームに関するパンフレットの配布を除いて、主にムスリムを対象にした活動である。

- ・1日5回の礼拝と金曜集団礼拝
- ・イスラームカウンセリング（随時）
- ・イスラームに関するパンフレットの配布
- ・各種年間行事の執り行い
- ・イスラームへの入信手続、入信証明書の作成

- ・イスラーム形式の結婚手続き、結婚証明書の作成
- ・勉強会の運営
- ・ザカート・サダカの募集
- ・イスラーム関連用品の提供

この他、名古屋モスクでは「自主グループ」による勉強会やイベントも開催されており、このモスクの際立った特徴であるといえる。

サラ氏によると、名古屋モスクではモスクに集まるムスリムたちで「自主グループ」をつくり、勉強会やお茶会などの催しを定期的に開催している<sup>(11)</sup>。それぞれの会はムスリムではない人に対しても開かれたものになっている。

2017年現在、活動中の自主グループは対象別に、①女性のみ、②子どものみ、③幼児向けクラス、④一般向け講座に分かれている。第一の女性のための自主グループには、お茶会（毎月第1土曜日午後3時～4時55分、日本語）、女性勉強会（毎月第2～5土曜日午後3時～4時55分、日本語）、イクロの会（毎月第2・4土曜日午後2時～3時、日本語）、クルアーン&イクロのチェック（毎月第1土曜日午後3時～5時、インドネシア語・英語・日本語）、ムスリマ<sup>(12)</sup>サロン（不定期、ムスリマのみ、現在休止中）がある。第二の子どものみの自主グループには、子ども勉強会（毎週土曜日午後3時～4時45分、日本語）、中高生お茶会（毎月第1土曜日午後5時～6時、中高生男女別、日本語、第2～第4土曜日は同じ時間帯に中高生向けスペースを用意）がある。この中高生向けお茶会については後述する。第三の幼児向けクラスは、毎月第1・3土曜日午後2時～2時45分（日本語、2歳半～未就学児対象、小学校低学年の子どもも受け入れ可能）に開かれている。最後に一般向け講座として、「イスラームとアラビア語講座」（毎月第4日曜日午後2時～5時、日本語・英語）が開かれている。この講座はムスリムではない人を対象としており、午後2時～3時半「アラビア語講座」、午後3時半～4時「イスラームとは？」、午後4時～5時「初めてのアラビア語」



という構成になっている。

以上のように、名古屋モスクでは週末を使い、日本人ムスリマを対象とするお茶会や勉強会、子ども向け、中高生向け、幼児向けの勉強会やお茶会、一般向けの講座を開催し、ムスリムだけでなくムスリムではない人にも開かれた活動を積極的に行っていることがわかる。

### 3-2-2. 第二世代のアイデンティティ・クライシスをめぐる課題

今回サラ氏が最も時間をかけて説明してくれたのは、第二世代のアイデンティティ・クライシスの問題であった。日本のムスリムの第一世代は、1980年代半ばから後半にかけて来日した人たちである。その多くはスリランカ、パキスタン、バングラデシュから来日した人であるという。彼らが日本人の女性と結婚して生まれたのが第二世代のムスリムである。第二世代の最年長は現在40歳になっており、そろそろ第三世代が誕生してくる時期であるという。

第一世代の父親は母国のイスラーム文化圏のなかで幼少期から自然にイスラームを学んでいる。その点で、日本で育つ第二世代とは異なる。しかし、第一世代の父親は自分が母国で受けたイスラーム教育、つまり宗教を信仰することが当たり前で環境のなかで受けたイスラーム教育の経験にならない、子どもたちにイスラームを教える。一方、第二世代の子どもたちにとって、そのようなイスラーム教育は、とすれば形式的なイスラームのルールの押しつけに思えてしまうのだという。

第二世代の教育において、母親の役割は大きいとサラ氏は語る。それは、第一に母親の方が日常的に子どもたちと関わっていること、第二に、日本人の母親は日本の環境を経験的に理解しており、父親と子どもの両方を理解することができるからであるという。

第二世代の子どもたちが直面する困難の背景には、日本におけるイスラームに対する歪んだ認識がある。それを象徴する近年の顕著な出来

事は、ISに関するメディア報道である。サラ氏によると、特にここ数年、メディアでのイスラーム報道は偏っているという。メディアではISに関する報道で連日のように、「イスラーム国」という訳語が使用された。このことにより、イスラームとIS、イスラームとテロを結びつける認識が広まった。名古屋モスクは、メディアに対して「イスラーム」を使用しないように依頼したが、現在もなおISの訳語としてイスラームを使用するメディアがあるという。その結果、第二世代の子どもたちのなかには、「イスラーム国」というあだ名をつけられた子どももいたということであった。

学校で第二世代が嫌な思いをしたり、困難に直面したりする出来事が起こっている。そのため、サラ氏は学校でこのようなことがないように、名古屋市教育委員会から各学校に周知してもらうように依頼したが実現には至らなかった。一方、津教育委員会はこの問題に対し、平成27年に外国籍の子どもに対する学校での対応について各学校に通知を出したという。サラ氏の現在の活動の原点は、子どもたちを取り巻く環境を少しでも変えたいという思いである。

サラ氏によると、2017年現在、日本のムスリム人口は約14～15万人で、そのうち日本人は2～3万人だという。ここには改宗したムスリムは含まれていない。単純に計算すると一つのモスクに200～300人の子どもたちが来ることになるが、実際、子どもたちは小学校高学年になるとモスクに行きたがらなくなるという。そこには子どもたちのアイデンティティ・クライシスがみられる。子どもたちは、他の子どもたちと同じでいたいために、イスラームから離れてしまう。中部地方の他のモスクに通っていた第二世代の報告によると、子どもたちの半分がイスラームから離れてしまったという。あるモスクに通っていた第二世代からの報告によると、いわゆる族に入る子どもたちもいる。また、ムスリムだと悟られたくないため、学校で自分をス

ペイン人だと言ったり、アメリカ人だと言ったりすることもあるという。

このような状況を少しでも変えるため、また子どもたちを守るため、名古屋モスクでは2014年8月から「中高生の会」<sup>(13)</sup>を立ち上げた。普段のモスクの活動には積極的でない子どもたちも中高生の会には来るという。

子どもたちが安心して集えるように、中高生の会を開いているその時間帯、その部屋には中高生以外の小さな子どもや大人の入室を控えていただくようにしているという。子どもたちの兄弟姉妹も入れないようにする。これはクレシ氏の協力あってのことだという。会では、自分たちの日頃の経験を話し、悩んでいるのは自分一人ではないことを共有することが大切だとサラ氏は語る。第二世代の子どもたちが抱える問題をより広く知ってほしいと、平成28年7月16日に放送されたNHKの番組「ウワサの保護者会」には子どもたちとサラ氏が出演した。

サラ氏は、名古屋モスクの活動のなかで、この「中高生の会」と「日本人ムスリマのお茶会」の2つの活動が非常に大切だと語る。日本人ムスリマのお茶会はすでに24年間活動している。外国人を入れないということで批判もあったが、やはり日本人の女性が抱える問題は、外国人の女性が抱える問題とは異なるという。子どもの問題について、日本人の母親同士が集まり、情報や悩みを共有することが大切であり、子どもの問題についても母親同士であるから共有できることが多いという。

#### 4. 東京ジャーミイ（子島進、協力：三沢伸生）

東京ジャーミイでのインタビューに関する基本情報は以下のとおりである。

日時：2018年5月3日15：00～

場所：東京ジャーミイ

アラス ムハンメッド・ラーシット（代表イマーム）

タンヌル レムティラ（事務担当）通訳（トルコ語、日本語）

同モスクは、1938年設立であるが、建物自体は2000年に再建されている。金曜礼拝の参加者は、700-800人で、このうちトルコ人は30人程度である。在東京のトルコ大使館所属している。同モスク（宗教法人東京トルコディヤールネットジャーミイ）の理事会の理事7名中、6名がトルコ人である。理事会の代表はイマームが務める。3、4年交代で、トルコから派遣されている。事務スタッフは4名で、日本人2、トルコ人1、ウイグル人1の構成となっている。

イマームのムハンメッド氏はカイセリに生まれ、イスタンブール大学にて神学を学んだ。2007年、政府宗教局イマームとなる。2013年より東京ジャーミイにてイマームを務めている。

つづいて地域との交流についてである。ジャーミイは年中無休で、開設時から開放し、日本人との交流を大事にしている。日本人を心から受け入れるというのが基本方針で、イスラームの正しい姿を見せたいと思っている。しかしセミナーだけでは不十分であり、言葉に加えて行動が重要だとイマームは述べた。

ジャーミイの建築の美しさを称賛する日本人見学者が多いからであろう。日本人は、イスラームをアートとして見ているという印象をもっているとのことで、モスクの美しさを生かしてフォトコンテストを事務スタッフが企画し、訪問時にウェブ上で実施していた（<https://tokyocamii.org/ja/ニュースとお知らせ/東京ジャーミイ%E3%80%80写真コンテスト/>）

近隣との近所付きあいについては、次のようにイマームは述べている。イードの際にはモスク内でケバブやパキスタン料理を用意し、外から来る人に振舞っている（通常の日曜礼拝後にも振る舞い飯がある）。イードには2000人近い人が集まることから、騒音には気をつけている。

地域のお祭りには参加していない。しかし、渋谷区とイスタンブールのベイオウル区が姉妹都市提携を結んでいる関係で、2003年、2015年にはトルコのオスマン軍楽隊の公演が、2003年にはメブラーナの回転舞踊が渋谷区で実施される

など、ジャーミイ単体ではないが、渋谷区との関連文化事業は行われている。

モスクに隣接するイスラーム研究センターが完成したら、中東、中央アジア研究者との交流を深めたい。図書館を併設しているので、諸言語のイスラームおよびトルコ関係の書籍を収集、便宜供与をはかっていきたい。

最後に、被災地支援についても触れておきたい。東京ジャーミイは、2011年から福島と仙台の被災者のためのチャリティーバザーを行い、収益を自治体に寄付していた。2018年にも4月22日にチャリティーバザーを駐日トルコ共和国大使館にて主催した。そして収益の74万円を宮城県知事に寄付したが、これは被災孤児の奨学金に充当されるとのことであった。

## 5. おわりに

本報告では、まず大塚モスクの長老であるアキール・シディキ氏のライフヒストリーを通して、日本のムスリム・コミュニティの形成について述べた。1980年代末期にムスリムが急激に増加し、やがてモスクやハラール認証への需要が生じたこと、その後、ライフステージの進展に応じて、幼稚園や学校、墓地などに対するニーズが高まったことを確認することができた。

中部地方の二つのモスクからは、一般向けの公開講座が開かれていることを確認した。岐阜モスクにおける2017年12月時点での公開講座は、イスラーム文化講座とアラビア語講座の2つが開講されていた。前者では、ムスリムの礼拝や食生活やイスラーム圏の音楽を紹介したり、アラビア語書道のワークショップを行っている。講座終了後には食事が提供される。後者は、1年間をかけて初歩のアラビア語が学習できるように構成されている。

名古屋モスクではモスク近隣の人々と活発な交流を行っている。イフタルへの招待、モスク近隣の茶道教室の先生からのお茶席への招待など、相互交流も行われている。名古屋モスクでは「自主グループ」が作られて、勉強会やお茶

会などの催しも定期的に行っている<sup>(14)</sup>。それぞれの会は、ムスリムではない人に対しても開かれたものになっている。女性のための自主グループには、お茶会、女性勉強会、イクロの会、クルアーン&イクロのチェックなどがある。

子どものみの自主グループには、子ども勉強会、中高生お茶会、中高生男女別、日本語などがある。日本人ムスリマを対象とするお茶会や勉強会、子ども向け、中高生向け、幼児向けの勉強会やお茶会、一般向けの講座を開催し、ムスリムだけでなくムスリムではない人にも開かれた活動を積極的に行っていることがわかった。

東京ジャーミイでの聞き取り調査からは、ジャーミイの建築の美しさを称賛する日本人見学者が多いことに着目したフォトコンテストなど、アイデアを凝らした企画も実施されていることがわかった。

「在日ムスリムによる多文化共生社会構築の試み」は、2019年度まで継続である。これまでに収集した資料をもとに、2019年度中に最終報告をとりまとめることとしたい。

## 引用文献

- 伊吹早織, 2017年「不足する「ムスリム霊園」日本で暮らすイスラム教徒の“永眠の地”はどこに」  
<https://www.buzzfeed.com/jp/saoriibuki/where-muslims-lie>
- 齊藤泰, 2008年「わが国の国際教育協力の理念及び政策の歴史的系譜：草創期から70年代初頭まで」国立教育政策研究所紀要第137集, 149～166ページ。[https://www.nier.go.jp/kankou\\_kiyou/kiyou137-14.pdf](https://www.nier.go.jp/kankou_kiyou/kiyou137-14.pdf)
- 子島進, 2014年『ムスリムNGO-信仰と社会奉仕活動』山川出版社。

## <注>

- (1) 岐阜モスク <http://nagoyamosque.com/gifumosque> (2018年10月3日最終閲覧)
- (2) 名古屋モスク <http://nagoyamosque.com/about> (2018年10月3日最終閲覧)

- (3) オバリ氏からの聞き取りによる (2017年12月11日)
  - (4) 受講者の感想はウェブ上で紹介されている。
  - (5) 徳島にもインドネシア人が200名以上研修生として住んでいたという。
  - (6) 名古屋モスク開所に至る、より詳しい説明は名古屋モスクのウェブ内の「名古屋モスクの歴史」を参照のこと。
  - (7) 名古屋モスク「見学者の感想」<http://nagoyamosque.com/readme/visit/kengakukansou2015>(2017年12月24日閲覧)
  - (8) サラ氏からの情報提供による (2018年10月6日)
  - (9) 名古屋モスク「地域との交流」<http://nagoyamosque.com/category/recent-state/local-report> (2017年12月24日閲覧)
  - (10) 名古屋モスク「名古屋モスクの活動内容」<http://nagoyamosque.com/about/activities> (2017年12月24日閲覧)
  - (11) 名古屋モスク自主グループ・ブログ <http://group.nagoyamosque.com/about> (2017年12月24日閲覧)
  - (12) ムスリム女性を意味する。
  - (13) 「中高生の会」はその後、2018年1月に「SYM (Space for Young Muslims)」(ヤングムスリムのためのスペース) に名称変更となった。サラ氏からの情報提供による (2018年9月30日)。
  - (14) 名古屋モスク自主グループ・ブログ <http://group.nagoyamosque.com/about> (2017年12月24日閲覧)
- 子島進 (研究員／国際学部国際地域学科教授)  
服部美奈 (客員研究員)



## **Local Exchange Programs by Muslims in Japan:**

NEJIMA Susumu and HATTORI Mina

This paper sheds light on the local exchange programs by mosques in Japan. Currently, 150,000 Muslims live in Japan, and they have built about 100 mosques in the country. Some of the mosques have started programs for promoting friendship with local Japanese, and Nejima and Hattori visited four mosques for interview: Masjid Otsuka, Masjid Gifu, Masjid Nagoya, and Tokyo Camii. They invite neighbors for Eid (Islamic festivals), tea party, and cultural programs such as Arabic calligraphy. These efforts should be highly appreciated for creating multicultural society in Japan.